ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクション
プロジェクト
代　表：金戸 美紀予
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

石井桃子から学ぶ⑥
子ども時代をたのしむ

言葉の表現する喜び

◆私は「絵本ていうのは子どもに読ませる本ではない」という編集方針ですから、「絵本は子どもに大人が読んでやる本」です。小学校へ入るようになっても、小学校の高学年になっても、絵本を読んでやった方がいいです◆子どもは喜んで聞きます。なぜか。お母さんが傍にいてくれるからですよ。親父が傍にいるからです。本を読んでもらってる時は一緒にいられるんですよ。これは、子どもが一番望んでいる時間、時間と空間を共有しているんです◆そして、言葉の喜び。言葉の喜びってものを共有するんです。その時に、ほんとに読み手の言葉ってのが、子どもの中にすーっと深く入り込んでいく。だから、食べちゃう。そうすると口から出てくる。食べるってこと、喜びの言葉を食べるのは、子どもにとっては楽しいことですが、それが自分の口から表現できるってのは、もっと楽しいことです。言葉っていうものに対する、まあ「言葉の表現する喜び」ってのをその時に知りますね。

言葉って教える必要はない

◆意味は分からなくても、ちゃんと子どもは覚えますから、前後の関係でだいたい意味が、ニュアンスが読み取れるんです。だから、子どもが知らない言葉ってのは、別に教える必要ないんです。これは知らないだろうって説明する、そんなことは余計なことです。ほっとけば、だんだん成長する過程でちゃんと子どもは分かりますから、教えるってことは、あんまり読書の中では考えられないことですね。

聞いても聞かなくてもそっちの勝手

◆私は、子どもに読んでやる時にいつも思います。「聞いても聞かなくてもそっちの勝手だ」と思ってんですよ。読むのもこっちの勝手ですから、だから向こう向いてても、私はちっとも構いません。よそへ行ってしまっても、私は読んでます。隣の部屋で笑ったりしてますからね。ちゃーんと聞いてるんです。歩きながらでも聞いていますよ。

耳から聞く

◆読んでもらうってことは、ものすごい子どもにとって言葉の体験としては、学校で字を習うとか教えられるとかっていうよりも大きな力になるんです。ほんとの言葉の力っていうのは「耳から聞く」っていうことなんですね

本が読めない原因…

◆それが今、非常に弱くなってしまっている。もう子どもは赤ちゃんの時から、テレビの機械語と騒音語を聞いていますから。言葉ってのは、気持ちが通じるんです。そして、自分の気持ちも、言葉によって大人につながることができる。その喜びってのをしっかりと知っていかないと、読書はできませんね。

◆今の子どもたちの日常生活ってのは、なんか地に足がついていないですね。生活実感ってのを小さい時に体験しない子どもがかなりいます。これも、本が読めなくなる大きな原因なんです

◆生活実感、生活の中でいろんなことを実感していないと、物語も小説も読めないんですね。言葉が、ぴーんと来ないと駄目なんです。

（つづく）

子どもたちへのメッセージ

子どもたちよ
子ども時代をしっかりと
たのしんでください。

おとなになってから
老人になってから
あなたを支えてくれるのは
子ども時代の「あなた」です。
石井桃子
2001年7月18日

「かつら文庫」50周年を記念しての特集、ＮＨＫ「首都圏ネットワーク」で紹介されたもの。
2008.3.7 放送